

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

漢語の身体名称に見られる特殊変化(2) : 「踝」の諸語形をめぐる憶説

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 神戸市外国語大学研究会 公開日: 2003-09-30 キーワード: 作成者: 太田, 斎, Ota, Itsuku メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/806

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



漢語の身体名称に見られる特殊変化 (2)

—「踝」の諸語形をめぐる憶説—

太 田 齋

§3 “踝拉骨”の“拉”

“踝拉骨”の“拉”が如何にして成立したのかについては幾つかの過程が想定し得る。先ずは paradigmatic な変化要因について検討することしよう。

陝西蒲城：核桃侷拉 xur²⁴ t^hau³¹ k^hua⁵³ la³¹ 踝骨 709

河北曲陽：脚胛骨 踝子骨 词汇267

河北获鹿：胛骨头 踝子骨 词汇267

上掲例については、その字面から「股」との混交によって生じた可能性が考えられる。“踝”は音韻法則に則って規則的に変化すれば、北方方言においては“胛”と声母しか違わないことになる。今普通話で例えれば“踝骨 huàgǔ：踝”：“胛骨 kuàgǔ：髌骨”となるはずであった。上の陝西蒲城、河北曲陽、獲鹿方言の「踝」の例はその字面から、このような音声的類似を契機として「股」との間に混交を生じ、成立したのと考えてよい。曲陽方言の例は“踝骨”が類音牽引で“胛骨”と同音になって、同じ漢字表記が為されるようになり、紛らわしいので両者を区別するために前者に「足の」+“胛骨”と説明要素を付加したものであろう。後者についての記載がないので、こちらは“胛骨”のままなのか、それとも語呂をあわせるべくこちらも何らかの説明要素を付したもののなのか不明である。このように「踝」と「股」が相互に特殊な音声変化を生じさせるような関係にあることが認められるが、

それが広域的に認められるかどうかについては、慎重であらねばなるまい。

以下の「股」,「股下」,「髌骨」を意味する方言語彙の例を参照されたい。

山东博山：胯骨 $k^{h}ud^{31-55}ku^0$ 研究 136

山东莒县：胯骨 $k^{h}ua^{31}ku^{55-13}$ 125

河北定兴：胯骨/ $kua^{314-31}gu\sim ku/$ 159

山东威海：胯胯拉子 $k^{h}ua^{312}k^{h}ua^0la^{33}ts\eta^0$ 胯骨 山东 190

山东淄川：胯子 $k^{h}ud^{31-55}\theta^0$ 胯骨 84

山东桓台：胯子 $k^{h}ud^{31-55}ts\eta^0$ 腰两侧和大腿之间 志 701

甘肃陇西：髌/ $ke^2/$ 那里 胯下 706

甘肃舟曲：髌/ $k\grave{e}i/$ 拉 大腿裆 676

甘肃天水：合拉 $\zeta k^{h}uo\ la$ 胯下 普通 2590

山东平度：腿卡拉 $t^{h}ei^{55-45}k^{h}a^0la^0$ 胯下 118

河南舞阳：腿珂拉 $t^{h}ei^{53}k^{h}u^{31}la^{24}$ 两腿间 61

河南原阳：腿开拉 $\zeta t^{h}uei\ \zeta k^{h}ai\ la$ 胯下 普通 2590

山东阳谷：腿昏晃 $t^{h}uei^{53}k\theta^{13}la^{42}$ 两腿中间 (=曹县, 枣庄) 山东 191

山西太原：腿昏晃 $t^{h}uei^{53}k\theta^{54-2}la^{45}$ 大腿根儿 词典 114

山西平遥：腿昏晃儿 $t^{h}u\ae^{53}k\Lambda^{54}l\alpha^{13-31}z\Lambda^{23-45}$ 大腿根儿 119

山西沁县：腿昏晃 $t^{h}uei^{213-41}k\theta^{24}l\Lambda^{24}$ 31

山西临汾：腿圪拉儿 $\zeta t^{h}uei\ \zeta ku\ l\ae$ 胯下 普通 2590

山西长治：腿圪拉 $\zeta t^{h}uei\ k\theta^{25}\ \zeta la$ 胯下 普通 2590

山东博山：腿哈拉 $t^{h}uei^{55-214}x\alpha^0la^0$ 胯下 研究 136

山东新泰：腿昏晃儿 $t^{h}uei^{55}x\theta^{213-212}lar^0$ 指肛门和生殖器部分 82

山东济宁：(腿)哈拉儿 ($\zeta t^{h}uei$) $\zeta x\theta\ \zeta lar$ 胯下 普通 2590

河北张家口：腿哈拉 $t^{h}uei^{55}x\gamma^{32}l\alpha^{42}$ 胯下 志 1909

河北广平：腿合拉 胯下 (=邯鄲县) 词汇 266

河北巨鹿：腿閩沓儿 t^hei⁵³ xə³¹ lar²¹ 两腿之间 703

河南洛阳：腿黑拉儿 t^huei⁵³ xu³³ ləu⁰ 腿裆的空隙 研究 156

山西忻州：腿黑拉儿 t^huei⁵³ xə⁷² lər⁵³ 裆，两条腿的中间 159

河南濮阳：嘿啦 xe⁵⁵ la²¹³ 胯 95

河北平山：合拉 c^hxə c^hla 胯下 普通2590

河北滦县：合拉 胯下 (=三河，建屏，平山，井陘，赞皇)
词汇 266

河北乐亭：哈拉 胯下 词汇 266

甘肃兰州：合拉 c^hxɿ c^hna 胯下 普通 2590

甘肃武威：合拉 胯下 762

新疆乌鲁木齐：合拉 c^hxə la² 胯下 普通 2590

内蒙古科尔沁：哈拉巴 髌骨 978 =内蒙古乌兰浩特 933

甘肃永昌：哈喇叭 两股间至两腿分岔处 1016

“沓兒”は普通話と同じであれば、「隅っこ，端っこ」というような意味で，“腿沓兒”は太ももの付け根ということになる。ただし，方言によっては指示する場所がずれて「股」を示すようになっている場合もある。“合拉”の方は普通話の“縫儿”に似て「割れ目，裂け目」を表すが，また指の付け根や太ももの付け根のような枝状に分かれる部分をも指すと考えられる（後で改めて論ずる）。山東威海方言の例を除けば，“腿～”ばかりで，“胯哈拉”，“胯坨拉”，“胯沓兒”に該当する方言語形の報告例はない。管見の及ぶ限りで“腿胯”というような語形の報告例も見当たらないのだが，“哈拉”，“坨拉”，“沓兒”はその形態上の特徴からみて“胯”が変化した，もしくはこれらと何らかの類音関係にある語が“胯”に取って替わったものと思われる。後者であれば，“腿胯” — “土块”の音声的類似を挙げるができる。“土块”はまた多く“土坨拉”のような言い方をすることから，“哈拉”，“坨拉”，“沓兒”への連想が働き，前者を“腿哈拉”，“腿坨拉”，“腿沓兒”

のように言うようになったのかも知れない。“土坷拉：土くれ”との類音牽引については以下の例を参照されたい：

- 山东平度：腿卡拉 t^hei⁵⁵⁻⁴⁵ k^ha⁰ la⁰ 胯下 118
土坷拉 t^hu⁵⁵⁻⁴⁵ k^ha⁰ la²¹⁴ 91
- 山西临汾：腿圪拉儿 ʔ^huei ɕku lər 胯下 普通 2590
土疙瘩儿 t^hu⁵¹ ku¹³ ta⁰ 土块儿 66
- 山东阳谷：腿沓晃 t^huei⁵³ kə¹³ la⁴² 两腿中间 (=曹县, 枣庄) 山东 191
坷拉 k^hə⁵⁵⁻²² la⁰ 土块儿 (=枣庄) 山东 15
脚合晃 tcyə¹³ xə⁴² la¹³ 脚趾缝 (=菏泽) 山东192
- 山西长治：腿圪拉 ʔ^huei kəʔ⁵ ɕla 胯下 普通 2590
土圪拉 t^hu⁵³⁵ k^həʔ⁵⁴⁻⁴ la²¹³⁻⁴⁴ 75

-
- 山东博山：腿哈拉 t^huei⁵⁵⁻²¹⁴ xa⁰ la⁰ 胯下 研究 136
土拉块 t^hu⁵⁵⁻²¹⁴ la⁰ k^hue³¹ 土块 研究 114
坷拉 k^ha²¹⁴⁻²² la⁰ 地里的土块 研究 114
- 山东新泰：腿沓晃儿 t^huei⁵⁵ xə²¹³⁻²¹² lar⁰ 指肛门和生殖器部分 志 82
土拉 t^hu⁵⁵⁻²¹³ la⁰ 土 志 67
坷拉 k^hə⁵⁵⁻²¹³ la⁰ 土块 志 67
坷拉蛋 k^hə⁵⁵⁻²¹³ la⁰ tã³¹ 志 67
- 河北张家口：腿哈拉 t^huei⁵⁵ xyʔ³² la⁴² 胯下 志 1909
土坷拉 t^hu⁵⁵ k^hxyʔ³² la⁴² 土块儿 志1903
- 河北巨鹿：腿阂晃儿 t^hei⁵³ xə³¹ lar²¹ 两腿之间 703
坷拉 k^hə³³ la²¹ 土块 693
坟阂晃 fən³¹ xə³¹ la²¹ 坟与坟之间的空地 693
- 河南洛阳：腿黑拉儿 t^huei⁵³ xu³³ ləw⁰ 腿裆的空隙 词典126
圪晃儿 ku³³ ləw⁰ ①狭窄偏僻的地方②角落 词典12
- 河南濮阳：嘿啦 xe⁵⁵ la²¹³ 胯 95

坳拉 $k^h e^{33-34} la^{33}$ 土块儿 47

山东济宁：(腿)哈拉儿 ($^c t^h uei$) $\underline{c} x \theta \underline{c} lar$ 胯下 普通 2590

土坳拉 $t^h u^{55} k^h \theta^{55} la^{13}$ 土块儿 山东 15

坳拉 $k^h \theta^{55-22} la^0$ 土块儿 山东 15

坳拉头儿 $k^h \theta^{55-35} la^0 t^h our^{42}$ 土块儿 山东 15

脚沓晃子 $tcie\theta^{213-35} k^h \theta^{213-13} la^{43-54} ts\uparrow^0$ 脚趾缝 山东 192

今のところ“腿哈拉”，“腿坳拉”，“腿沓晃”三者がどのようにして成立したのか、及び三者相互の関わりがどのようなものであるのか解明できていない。ただ“腿坳拉”については先に“腿哈拉”，“腿沓晃”があって、それと“土坳拉”との間に類音牽引が生じてできたのではないかと考えられる。筆者の調べた限りにおいては“胯骨：髌骨”，“(腿)合拉：股下”が混同されて用いられているような状態はあるにせよ、「股」が“(腿)哈拉骨”，“(腿)坳拉骨”，“(腿)沓晃骨”のような語構成で現れる例はない。それゆえ「股」を表す“(腿)哈拉”，“(腿)沓晃”が“踝拉骨”より先に成立していたとしても、これらと“踝骨”の間には十分な音声的類似が見られないから，“踝骨”がこのような「股」を表す語形よりの類推で“踝拉骨”のような語構成をとるに至ったとは考え難い。“踝拉骨”の成立を論じるに当たって、この「股」と「土くれ」の類音牽引は関連するところはなさそうであり、考慮するには及ばないようである⁽⁸⁾。

以上論じてきたところでは説得力のある説明は見出せなかった。今もう一つの解釈の可能性を検討してみたい。それは§1で推定した $yua\ ku\theta t \rightarrow yuat\ ku\theta t$ の形式から更に $yuat\ ta\ ku\theta t \rightarrow yuat\ la\ ku\theta t \rightarrow xua\ la\ ku$ のような変化が生じたと見るものである。つまり入声韻尾を添え物の母音を加えて二音節化して保つという変化である。添え物の母音は恐らく前後の音節如何で音価が異なるものと考えられる。現代北方方言においては $-p, -t, -k$ 及び $-m$ といった韻尾は失われてしまったが、一部の複合語の中にその痕跡を見ることができる。それについては既に太田(1995)で示したが、今改め

て該当すると思われる例を挙げる：

山东利津：𦉳么 syə⁵³⁻⁵⁵ mə⁰ 不住地小视(贬) 105 ← “寻”

𦉳么 t^hiã³⁵⁻²¹² mə⁰ 用舌头不断地舔 106 ← “舔”

山东聊城：蚕妹儿 ts^hã⁴²⁻⁴⁴ meir⁰ 蚕 107 ← “蚕儿”

山东枣庄：今门儿 tciē²¹³⁻²¹² mer⁰ 今天 78 ← “今日”

山东曲阜：今每儿 tci²¹²⁻²¹¹ meir⁰ 今天 志 58 ← “今日”

cf. 今门儿 tciã¹³ mər⁰ 今天 通讯 130 ← “今日”

山东济南：今每儿 tciã²¹³⁻²¹ mər⁰ 今天 志 44 ← “今日”

tci²¹³⁻²¹ mər⁰ 今天 志 44 ← “今日”

河南濮阳：今们儿 tci³⁻³⁴ mər⁰ 今日 67 ← “今日”

河南汤阴：砍马刀 螳螂 558 ← “砍刀”

山东东营：夹巴道儿 tcia⁵⁵⁻⁴⁴ pa⁰ tər³¹ 小胡同 1431 ← “夹道儿”

河北滦南：ʂl³³ pə⁰ 涩 96 ← “涩”

山东临清：不拉 pu³²³⁻⁴⁴ la⁰ 拨动 111 ← “拨”？；“拨” 214(阴平) 12

山东利津：蜜拉 mi²¹⁻⁴⁴ la⁰ 甜食，显出感到香甜的样子 106 ← “蜜”？；

“蜜” mi²¹(去) 21

上掲例には異論の余地のあるものもあり，中には類推，民間語源などによって出来上がった語形もあろう。問題なのは -p, -m の例は比較的類例を見つけ易いが，-t, -k の例については確たるものがないということである。このことが何らかの音声上の理由によるものなのかどうか，また複合語に見られるこのような残り方が単字音の音韻変化とどのように関係するかについても検討せねばならないが，ここではこれ以上は触れない。いずれにせよこれらの韻尾の消失の先後関係については一先ずは同様と考えてよからう。そうであれば入声韻尾消失の過程で，-p（及び陽声韻尾の -m も）のみ残して -t, -k は失われている，若しくは -? に合流してしまっているような言語状況が広く分布していたと想定せねばならなくなる。これはやや不自然である。或いは -t, -k の方は異なった姿をとって保存されているかもしれない。上掲例

が正しく該当するものであれば、-t が l- として保存されていることになる。-k の方は例えば x- のような類似の声母として保存されているかも知れない。注意して探せばこれらについても該当例を見出すことができるのではないかと考える。本稿で対象としている“踝骨”はもし §1 で述べたことが正しいければ、その成立がかなり古いことになり、現代方言に -t 入声韻尾の特殊な保存の仕方の例が見出し難くとも、それが直ちに推定を否定することにはならない。上掲の -p の例から考えれば、yuat kuət → yuat ta kuət のような分音を想定することは決して空論ではない。添え物の母音については無から有を生じたのではなく、何らかの語彙的意味を担っていた音節が音声的にも意味的にも「虚化」していたような状況が先にあった場合もある。上掲例で言えば山東聊城の“蚕妹儿”は“儿”[ɤ]が先行音節の韻尾と同じ音を自らの声母として取り込んで“妹儿”[meir]となったものだし⁹⁾、山東曲阜方言などの「今日」は“日”が[ɤ]となった後にやはり先行音節の韻尾と同じ音を自らの声母としたか、若しくは先行音節声母を自らの声母として取り込んだと考えられる。これ以外の例も同様に何らかの実詞にその來源を求めることができるものがあるだろうが、これについては今は可能性を指摘するに留めておく。yuat kuət → yuat ta kuət のような変化は現代方言の中に類例を求めることができる。既に太田(2001)で指摘した複合語中の頭位でない音節の声母 t が l となる例は以下の通り：

- 河北河间：扑楞蛾 p^hu⁴⁴ ləŋ⁰ uo⁵³ 灯蛾 776
 cf. 河北昌黎：扑灯蛾儿 p^hu³²⁻³³ təŋ³²⁻³³ ŋɤr¹³ 灯蛾 187
 河北赵县：皮拉虎子 传说中的狐狸精 549
 cf. 山东临清：貔达驹子 p^hi⁵³⁻⁵⁵³ ta⁰ xəu³²³⁻⁴⁴ tsɿ⁰ 传说中为崇怪兽，有人说指狐狸精 103
 山东曲阜：餐拉木子 ts^hā²¹³⁻²¹¹ la⁰ mu²¹³⁻²¹¹ tsɿ⁰ 啄木鸟 志 63
 cf. 山东济南：餐打木子 ts^hā²¹³⁻²¹ ta⁰ mu⁰ tsɿ⁰ 啄木鸟 志 47

ここで先に挙げた“合拉”に再度注目すると、語源が“豁”であるらしい

ことに気付く。以下の例を参照されたい：

河北新乐：脚豁拉 脚趾缝儿 (=灵寿) 词汇 268

天津市：豁拉缝 豁唇子 词汇 465

天津市：豁拉缝 $\text{cx}\text{x}\text{la}\text{f}\text{ə}\text{ŋ}^2$ 豁嘴儿 普通 2749

河北迁安：豁拉嘴儿 豁唇子 词汇 465

山西忻州：指头黑拉儿 $\text{ts}\text{ə}^2\text{t}^{\text{h}}\text{əu}^{\text{53}}\text{x}\text{ə}^2\text{l}\text{er}^{\text{53}}$ 手指缝儿 318

これらの例にみられる“拉”もまたその由来が如何なるものであるのか解釈に苦しむ。“豁”は中古音の帰属は“山合一入末晓”，広韻の反切は“呼括切”である。“豁”もまた $*\text{xuat} \rightarrow \text{xuat}\text{ta} \rightarrow \text{xuat}\text{la} \rightarrow \text{xu}\text{ə}^2\text{la} \rightarrow \text{xu}\text{ə}\text{la}$ のような変化を遂げたものである可能性がある⁽¹⁰⁾。但し普通話でも“窟窿 kūlong ” (← “孔 kōng ”), “机灵 jīling ” (← “精 jīng ”), “杳晃 gāla ” (← “角 jiǎo ”) のような分音式語構成の名残のようなものがあり，また“罗唆 luōsuo ” → “罗哩罗嗦 luōlīluōsuo ” のような造語法もあるが，そこでは多く l- が利用されている。また各地の方言には「反切語」という名称に代表される，一音節を二音節に分けるような言葉遊びがあるが，その場合にも l- が利用されることが多い。現時点で他に類例が見当たらないので，即断は慎むべきであるが，本稿で検討してきた“拉”の成立についての幾つかの可能性の中では最も考慮に値するものである。

§4 踝 [xuai] 拉骨

“踝拉骨”という語構成の語彙の中で少数ながら“踝”が [xuai] (陽平) となっている例がある：

陝西麟游：踝拉骨 $\text{xu}\text{æ}^{24-31}\text{la}^{31-44}\text{ku}^{31}$ 踝骨 584；

陽平調値24，去声調値44

陝西千阳：踝那骨 $\text{xu}\text{æ}^{24}\text{la}^{44}\text{ku}^{21}$ 踝骨 360；陽平調値24，去声調値44

吉林通化：踝拉骨 $\text{cx}\text{xu}\text{ai}\text{l}\text{ə}^{\text{c}}\text{ku}$ 踝子骨 普通2592

内蒙古呼和浩特：踝拉骨 xuai³² la³² kuə?⁴³ 踝子骨 566

河北张家口：踝拉骨 ɥxuei ɥla kuə?⁵ 踝子骨 普通2562

河南原阳：踝拉骨 ɥxuai lə ɥku 踝子骨 普通2562

河北阳原：踝拉骨 ɥxuei lə kuə?⁵ 踝子骨 普通2562

この五つの方言については所拠文献によれば、名詞接尾辞“子”はいずれも [tsɿ] である。これが弱化音節にあつて [lə] のように変化したとの推定も可能だが、ts- →l- の変化を示す实例はまだ見ない。今のところ、他に三つの解釈の可能性がある。その一は当該例を有する方言において、本来の“子”尾相当の接尾辞の音声形式はこれと異なっていたかも知れないというものである。普通話の浸透、普及によりそのような接尾辞はほとんど普通話の [tsɿ] に取り替えられてしまい、僅かな常用語彙の中にのみ痕跡的に残っているという可能性もあろうかと思う。もしそうであれば、方言によっては“踝 [xuai] 子骨”の“子”が、形態的に“拉”に類似した“子”尾相当接尾辞と混同されてこれに取り替えられ、*xuai lə ku のようになり、然る後に疊韻化（主母音の一致）を起こして *xuai la ku となったというようなこともあり得たことになる。ここで示した [lə] は例えばの表記で、厳密な検討を経たものではない。この解釈に立てば、この“子”尾相当接尾辞が意味的に“子”に相当する方言固有語であるのか、“子”の字音（止開三上止精）と系譜関係があるかというような問題についても検討が必要となってくる。

北方方言の名詞接尾辞“子”は方言間で様々な変異を示し、機能的には対応しているが、同源ではないのではないかとの疑いを持たせるものも少なくない。以下はそのようなもののうち、t, l, z, といった声母で現れる例であるが、漢字表記及び声調調値は省略した：

山东牟平：tə 108＝山东微山(张楼，西平，赵庙) 1107，河北成安781，
峰峰91，获鹿5，井陘 649，沙河764；河南汤阴563；
山西忻州151

- 河北正定 : /de/ 814
- 河北魏县 : tɛ 68 = 河南商丘 简释407-415
- 河北大名 : tɛ ~ tə 646
- 山东菏泽 : tə ~ tɤ ~ ta 671-673
- 河南虞城 : /dei/ 520 = 山东曹县 普通191
- 河南濮阳 : tɛ 491
- 山西临猗 : təu 638
- 河北武安 : təʔ 879 = 山西长治108, 並关686, 寿阳 34
- 河南安阳 : tɿʔ 1065
- 山东东明 : tɛ ~ trɛ ~ tə ~ trə ~ tri 543
- 山东邹平 : tə ~ nə 863 = 山东定陶 696-697
- 河南睢县 : tɛ ~ nɛ 468-469
- 山西河津 : tei ~ nei 472
- 河南商丘 : tɛ ~ lɛ ~ nɛ 研究37
- 河南商丘 : tei ~ lən ~ nən 志515-522
- 山西五台 : leɪ ~ lə ~ tə 559
- 山西平顺 : lə 379
- 河南林县 : ləʔ ~ ɤ 616
- 山西沁县 : ləʔ 2
- 山西介休 : tsʌʔ ~ lʌʔ ~ zʌʔ 3
- 山东烟台 : rə 5
- 河北赤城 : /re/ 578
- 山西代县 : zəʔ 462

中には形態的にはむしろ“儿”の字音を思わせるようなものもあるが、いずれの方言においても別に“儿”尾が存在する。先に述べたように、肝心の上掲4方言の“子”尾はいずれも [tsɿ] であって、[lə] ではないということがこの説の弱点である。その二は“踝 [xuai] 子骨”と同様の発想で“踝

儿骨”という語形が生まれたとするものである。或いは方言間借用で取り込んだ“踝[xuai]子骨”の“子”を同義語の“儿”に取り替えたとしても良い。方言によっては“儿”が[lə]のような音声形式になっているものがある。そのような“儿”を持ち、かつ名詞接尾辞“子”を本来使用しない方言にあっては、“踝[xuai]子骨”の“子”を訓読みして、*xuailəkuのような音声形式に変えることもあり得る。但し当該方言の“儿”の字音は[lə]ではない。これについても本来の字音は[lə]であったが、後に普通話の影響で[x]となってしまうと考え、“踝[xuai]拉骨”の“拉”を古い“儿”の字音を残していると考えられることも不可能ではないが、そのような古い“儿”と思しき字音を持つ類例が見当たらない。その三は“踝[xua]拉骨”と“踝[xuai]子骨”のぶつかり合いでその中間形態の“踝[xuai]拉骨”ができたというものである。この考えは§2.2で“踝[xua]子骨”を解釈するとき指摘したのと同様の推定である。“踝[xua]子骨”というタイプの語形は山東、河北に分布し、“踝[xuai]拉骨”の方は吉林以外については陝西省及び晋語圏に分布する。二つの語形のぶつかり合いは、“踝[xuai]子骨”が優勢の地域で“踝[xua]子骨”を生み、“踝[xua]拉骨”が優勢の地域で“踝[xuai]拉骨”を生んだということかも知れない。但し陝西省の二地点はこの解釈では説明できない。この二地点は少し離れてはいるが、隴海線沿いの北側に位置し、甘肅省に近い。何故このような“踝[xua]拉骨”優勢地域の西端とも言うべき地域に分布しているのか不可解である。陝西省で“踝[xua]拉骨”が優勢なのは陝北地区で、それ以外でこの語形の報告があるのは西南端の南鄭一地点のみである。麟游、千陽一帯のデータが十分に集まらないので確たることは言えないが、或いは移植によって生じた飛び火的な分布なのかも知れない：

- | | | | |
|----------|--|-----|--------|
| 陝西扶風：脚骨棖 | tcyo ³¹ ku ³¹ tsqæ ³⁵ | 踝骨 | 622 |
| 陝西宝鸡：脚巴骨 | ^c tcyo pa cku | 踝子骨 | 普通2592 |
| 陝西凤县：螺丝拐 | luo ²⁴⁻³¹ sɿ ³¹⁻⁴⁴ kuæ ⁰² | 踝骨 | 590 |

甘肃天水：拐核 $\text{c}^{\text{h}}\text{kuai}$ $\text{c}^{\text{h}}\text{xu}$ 踝子骨 普通2562

如上の周辺の方言の例を見てもこの地域の分布傾向は見えず、手がかりが掴めないのだが、方言地図を作成して広域的な分布状況を見ることにより明らかにすることができるかも知れない。いずれの解釈にも問題があるが、現時点では第三の解釈が“踝[xua]子骨”をも説明できるので、最も説得力があると考えられる。

§5 “核桃”を含む語形

もし§1で述べた“踝 *yua → yuak”という連音変化があったなら、発音労力の節減による介音の消失が起こって yuak → yak となった、若しくは更に音声的類似から固い塊のようにふくらんだ様が“核 *yək > yak”を連想させるということがあったかも知れない（この連想については後で改めて論ずる）。“核骨”という語形は管見の及ぶ限りで現代北方方言の調査報告の中には見出すことができないが、“核桃”を含む語形はある。

山东即墨：脚核桃 脚踝 坂本 123

山东寿光：脚核桃 $\text{tc}^{\text{h}}\text{y}\text{ə}^{213-22}$ $\text{xu}\text{ə}^{53-35}$ $\text{t}^{\text{h}}\text{ə}^0$ 踝骨 102

河北清苑：脚核头 （=河北安次，霸县） 词汇 266

河北昌黎：核桃骨 $\text{x}\text{ɤ}^{24}$ $\text{t}^{\text{h}}\text{a}\text{u}^0$ ku^{213} 脚腕两侧凸起的骨头 231

（=河北唐山，丰润，乐亭，滦县，大厂，兴隆，定兴；天津宝坻 词汇266）

河北玉田：核桃骨子 （=河北唐山） 词汇266

北京平谷：核头骨 $\text{x}\text{ɤ}^{55}$ $\text{t}^{\text{h}}\text{ou}^0$ ku^{214} 203

cf. 踝子骨 $\text{x}\text{ɤ}^{55}$ [xuai^{55}] $\text{ts}\text{ə}^0$ ku^{214} 203

河北定州：脚核桃 $\text{tc}^{\text{h}}\text{iau}^{33-35}$ $\text{x}\text{ɤ}^{24-42}$ $\text{t}^{\text{h}}\text{a}\text{u}^0$ 1129

cf. 踝子骨 xua^{24-42} $\text{ts}\text{ɿ}^0$ ku^{24} 1129

脚踝子 $\text{tc}^{\text{h}}\text{iau}^{33-35}$ xua^{24-42} $\text{ts}\text{ɿ}^0$ 1129

河南密县：脚核桃儿 踝骨 600

陕西澄城：桃核 $\text{t}^{\text{h}}\text{ɔ}_{24}$ xu_{24} 踝骨 614

陝西三原：桃胡/tao³⁵ hu³⁵/ 踝骨 381

陝西耀县：桃胡 踝骨 381

陝西西安：核桃疙瘩(子) xw²⁴ t^hau⁰ ku²¹ ta⁰(tsɿ⁰) 踝子骨 106

陝西蒲城：核桃侷拉 xw²⁴ t^hau³¹ k^hua⁵³ la³¹ 踝骨 709

“核”は“梗開二入麦匣*ɣɛk>ɣak”と“臻合一入没匣*ɣuət”の二音あり、いずれも果実の中にある比較的大きなタネを意味する。この二音が異なる由来によるものか、本来一つの語であったものが、特殊な変化、もしくは方言間借用などによって、中古音段階で既にダブルット doublet を形成していたのか不明である。憶測の域を出ないが、“踝骨” yua kuət→yuak kuət→ɣak kuət 若しくは yua kuət→ɣa kuət→ɣak kuət のような変化を遂げて、“踝”が同音の“核”に取り替えられて、“核骨”という当て字が定着した後に、“核”の語義を明確にすべく“桃核”としたものであろう。北京平谷方言のような例が存在するが、恐らく“核骨”から“核头骨”となったのではなく、“核桃骨”から“桃”の主母音が弱化して“核头骨”となったものであろう。筆者の知る限りでは音声形式が明らかな“核头骨”はこの1例のみである。音声表記のない例の中の“核桃”の“桃”の実際の音声形式が [t^hau] となっているケースがあるかも知れないし、また逆に河北清苑方言などの“脚核头”の“头”が実際には [t^hau] のようになっているといったケースもあり得る。即断は禁物だが、漢字表記に即して言えば、“踝头骨”という語形の報告例は皆無である。§ 2. 2 で検討したことから分かるように、“踝头”という語がない状況において自律的に“踝骨”から“踝”+接尾辞“头”+“骨”という語構成に転ずるとは考え難い。同様に“核头”という語形も見当たらないからには、“核骨”から“核头骨”といった語形が誕生したとも考え難い。また“踝骨” yua kuət が、“核骨”と当て字表記されるようになり、それが定着した後に、“核”の意味を明確にすべく同義語“子”を重ねて“核子骨”となったと想定する余地はあるにしても、この“子”が名詞接尾辞と解釈されて、更には類似の名詞接尾辞“头”に取り替えられて“核头骨”といっ

た語形が誕生した、というような解釈もまた成り立ち難い¹⁰⁾。そしてまた“核頭骨” *y(u)ak dəu kuət→yak də kuət→yak lə kuət→yak la kuət という変化も考慮するに及ばないということになる。“脚核桃”は“脚核桃骨”の“骨”が取れたか、“核桃骨”から“核桃”となった後に改めて説明の要素として“脚”を前接したものだろう。“桃核”のタイプは“核骨”から“核”の語義を明確にするために“核桃”ではなく“桃核”と改めたということなのだろう。「クルミ」ではなく「モモの種」というような連想が働いている。“核”は既に述べたように果実の真中に（一つだけ）ある大きなタネを指し、「クルミ」や「桃のタネ」はその典型と言える，“核”から“桃核”を連想すると言うのもまた極自然なことである。

陝西方言の例は“核”がいずれも [xu] という音声形式になっているところからして，“踝骨”が *yuat kuət → yuat ta kuət→yuat tau kuət →xua? tau kuə?→xuə? tau kuə? のような変化を遂げた後，“核桃”への連想が働いて“核桃骨”という当て字がなされたか、或いはその“核桃”が“桃核”への連想が働いたことによって音節の転置が起こったとも考えられる。一説に依ると“核桃”は本来は“胡桃”で、五胡十六国時代に“胡”の字を避けて“核桃”と呼ぶようになったらしい¹¹⁾。ならば“胡”と“核”の間には音声的類似があるべきで，“胡”と“核”の関係は大凡のところ、yo : yuo? (<yuo?) 或いは xu : xuə? のようなものであったろう。ただ上掲例を見ると，“核”が“梗開二入麦匣”由来の音になっている語形もある。音声記号の無い例もあるので断定はできないが、山東寿光方言を除くと，“梗開二入麦匣”由来の音になっている語形は山東、河北方言ばかりで、他方，“臻合一入没匣”由来の音になっているのは陝西方言ばかりである。山東寿光方言にはそもそも [xə] という音節は存在せず、他方言で [xə] で現れる字音は一律に [xuə] になっているから、周囲の状況から見て“梗開二入麦匣”由来の音と見なしても良いだろう。或いは全くの憶測だが，“梗開二入麦匣”と“臻合一入没匣”の二音は本来地理的分布を異にする同義語

で、“臻合一入没匣”の地域で成立した“核桃”（<“胡桃”）を“梗開二入麦匣”の地域が借用した結果，如上の山東，河北地域に見られるような語形が成立したのかも知れない。

§6 “踝骨” — “孤拐”

“踝骨” *xuai ku* の声母が転置したと考えられるものがある。該当例は以下の通り：

甘肃天水：拐核 $^c\text{kuai } ^c\text{xu}$ 踝子骨 普通2562

甘肃白银：拐胡儿/*guāi huer/* 踝骨 888

甘肃张家川：拐踝儿 *kuei⁴² xuər²⁴* 踝骨 1408

推定される変化過程は *xuai(tsi) ku* → *kuai(tsi)xu* というものである。このような転置の類例は以下の通り：

山东曲阜：脖拉梗 *pue⁴² la⁰ kəŋ⁵⁵* 脖子 通讯123

 胥拉绷 *kɣ¹³ la⁰ pəŋ¹³* 通讯123

山东济南：胥拉瓣儿 *kə₂₁ la⁰ pər²¹* 膝盖 市志145

 波拉盖 *pə₂₁ la⁰ kɛ²¹* 市志145

この解釈の弱点はデータの制約があり，断言はできないが，地理的分布を見るとこの地域では“孤拐”という語形が優勢で，周囲に“踝 [xuai] (子)骨”という語形の分布が見られないということである。今のところは転置が起こったとする見方に代わる有効な解釈を持たないことと，本章で扱う他のタイプの語形をも説明できるところから，この解釈を採用しておきたい。

“踝骨” *xuai ku* の声母が双声化したと考えられるものは以下の通り：

山东临清：踝骨 *kue⁵⁵⁻³⁵ ku⁰* 脚腕关节 71

 骨踝 *ku³²³⁻⁴⁴ kue⁰* 71

山东青州：脚拐骨 *tɕyə⁴⁴⁻²¹⁴ kue⁵⁵⁻⁴⁴ ku⁰* 踝子骨 山东 191 ← “脚踝骨”

山东博山：脚拐骨ə *tɕyo²¹⁴ kue⁵⁵ ku²¹⁴⁻³¹ ə⁰* 踝子骨 研究 136 ← “脚踝骨”

山东淄川：脚怪骨子 *tɕyə²¹⁴ kue³¹⁻⁵⁵ ku⁰ ə⁰* 踝骨 84 ← “脚踝骨子”

- 河南郑州：拐骨 kuai⁵³ ku²⁴ 踝子骨 101 ← “踝骨”
- 山西山阳：拐骨 kuæ⁵² ku³¹³⁻⁰ 37 ← “踝骨”
- 内蒙古二连浩特：拐骨 ʔkuæ kuəʔ> 踝子骨 普通2562 ← “踝骨”
- 山西大同：拐骨 ʔkuæ kuəʔ> 踝子骨 普通2562 ← “踝骨”
- 山西离石：拐骨 ʔkye ɔku 踝子骨 普通2562 ← “踝骨”
- 山西静乐：拐骨儿 kuei²¹³ kur³² 踝子骨 653 ← “踝骨儿”
- 山西娄烦：拐箍儿 kuei³¹² kur³³ 脚踝 671 ← “踝骨儿”
- 山西古交：拐孤 kuei³¹²⁻³¹ ku²² 踝 583 ← “踝骨”
- 河南灵宝：拐骨疙瘩 ʔkuai ku ɔku ta 踝子骨 普通2562 ← “踝骨疙瘩”
- 河北万全：拐骨蛋儿 (=河北怀安) 词汇267 ← “踝骨蛋儿”
- 山西太原：拐子孤 kuai⁵³ tsɤ⁰ ku¹¹ 踝子骨 FY81-4/305 ← “踝子骨”
- 山西太原：拐子骨 ʔkuai tsə ɔku 踝子骨 普通2562 ← “踝子骨”

これらは“踝(子)骨”が xuai(tsi) ku → kuai(tsi) ku のように変化したものと考えられる。そしてこの語形から以下の語形が成立する：

- 山西太原：孤拐 ku¹¹ kuai⁵³ 脚掌两旁突出的部分 词典29
- 山西榆次：孤拐 ku¹¹ kuai⁵³ 脚踝 1012
- 山西忻州：孤拐 ku³¹³⁻³³ kuæ³¹³⁻³¹ 踝子骨，踝部内側和外側の突起部分 37
- 宁夏中卫：孤拐 ku⁴⁴ kuāi⁰ 也说脚孤拐，指脚脖子两旁突出的骨头，
即踝骨 129
- 山西左权：鼓拐 ku⁵³ kuæ⁰ 踝骨 45
- 山西原平：鼓拐 ku²¹³⁻¹³ kuai²¹³⁻⁴² 81
- 河南鹤壁：脚箍拐 tcy^Δ? ku³³ kuai⁵⁵ 1598

この場合、xuai ku → kuai ku → ku kuai のような音節の転置が考えられる。“孤拐”は“踝骨”がこのような変化をする以前に既に生じていたものなのか、このようにして成立したものが他の似た形状の身体部位にも転用されるようになったものなのか明らかでないが、以下の同じ語形を共有する身体名称がある：

“颧骨”—“踝骨”

- 辽宁岫岩：孤拐 颧骨 159
 脚孤拐 踝骨 159
 河北丰宁：脚孤盖 tɕiau²¹⁴ ku⁵⁵ kai⁰ 脚掌两侧突出的骨头 1081
 脸咕盖 lian²¹⁴ ku⁵⁵ kai⁰ 颧骨 1080
 河北巨鹿：骨拐 ku³³ kuai⁵⁵ ①颧骨②踝骨，脚～即是踝骨的突起部分 701
 河北灵寿：骨拐 ku²² kue²² 颧骨 志699
 山东德州：(脸)骨拐 (liǎ⁵⁵) ku²¹⁴ kuai⁰ 颧骨 81
 北京平谷：脸孤拐 lian²¹⁴⁻²¹ ku³⁵ kuai⁰ 颧骨 199
 河北深泽：脸骨拐 lien⁴⁵ ku³³ kuai⁴⁵ 颧骨 574
 河北博野：骨怪脸儿 ku⁴⁵ kuai⁰ lier²¹⁴ 高颧骨 志567

上掲の「頬骨」と「踝」に共有される“孤拐”，“骨拐”などと漢字表記される要素（以下“孤拐”で代表させる）はプッキリとふくれた部分を意味するようだが，もし如上の“踝骨”より生じた“孤拐”が「頬骨」に転用されたというのでないのならば，この“孤拐”は独自に誕生していたはずで，その字面はその意味内容を表していると思われるが，個々の字からはなぜそのような意味になるのか判然としない。「ほお骨」と「踝」及び「拳」はプッキリとふくれている，或いは出っ張っているところから，他の語源の場合でも以下のように同じ語形を共有する場合があります，一方から他方への連想は容易なようである：

“颧骨”—“踝骨”—“耳垂”—“拳头”—“胳膊”—“喉结”

- 河南周口地区：脸骨拽 ɕlian ɕku ɕtsue 颧骨 901
 河南太康：脸骨拽/lian⁵⁵ gu²⁴ zhuai⁵⁵/ 颧骨 583
 河南长葛：脸故拽/lian⁵⁵ gu²¹ zhuai²¹/ 脸蛋 620
 河南上蔡：脸骨拽/lian⁵⁵ gu⁵³ zuai³¹/ 颧骨 647
 河南密县：脸股拽儿 腮帮 600
 陕西扶风：脚骨拽 tɕyo³¹ ku³¹ tsu æ³⁵ 踝骨 622

陕西户县：脚骨棧 tcyɣ³¹ ku³¹ tsuæ⁵¹ 踝骨 326
 河南济源：脚骨爪儿 tciɛ? kuə tɕuæ 踝子骨 志521
 河南濮阳：脸垂子 lian⁵⁵ tɕ^huei⁴²³⁻⁴⁵ tsɿ⁰ 脸蛋 92
 脸垂儿 lian⁵⁵ tɕ^huər⁴²³ 脸蛋 92
 山西壶关：忽辘锤 xuə?ɔ luə?ɔ ɕtɕ^huei 咽喉 690 ← “喉咙锤”
 山东滕县：耳朵垂子 ɤ²⁴ to⁰ ts^hue⁵⁵ tsɿ⁰ 耳垂 566
 河南太康：屁股垂子/pi³¹² gu⁵⁵ chui⁵³ zi³/ 臀部 583
 宁夏中宁：胳膊锤子/kuo³¹ çhüei⁵⁵ zi⁵⁵/ 肘 544 ; çh [tʰ]
 甘肃静宁：柯锤子 kuo³¹ tɕ^huei⁴⁴ tsɿ⁰ 胳膊 109
 河南郟县：骨朵锥 拳头 557
 山西原平：圪捶 kɣ?⁰ ts^huei³³ 拳头 85

河南夏邑：踝子疙瘩 踝 525
 河南永城：踝子疙瘩 xuai⁵² tsɿ³³ kɣ²⁴ ta²⁴ 脚踝 565
 河南商丘地区：踝得疙瘩 xuai⁵³ tei⁰ kə²⁴ ta⁰ 脚踝 1749
 陕西子洲：踝拉圪堵 xud³³ la³³ kə?³ tu²¹³ 脚与胫连接处两旁突出骨 459
 陕西延川：眉脑圪□ mɿ³⁵ nau⁰ kɜ?³² tu³¹³ 前额 74
 陕西吴旗：眉眼圪堵子 mi³⁵ niæ⁰ kə?³ tu⁵²⁻²⁴ tsə⁰ 额头 陕北 117
 山东平度：气嗓疙瘩 ç^hi²¹⁴⁻⁵³ θaŋ⁰ ka⁵⁵⁻⁴⁵ ta⁰ 喉结 116
 河北张北：引嗓格蛋儿 喉头 658
 山西平鲁：咽嗓疙瘩 iey³²⁴ su⁵³ kə?¹²⁻² tæ⁵³ 咽喉 88
 河南洛阳：屁股圪蛋儿 p^hi⁴¹² ku⁰ kuw³³ tɕu⁴¹² 臀部鼓起的部分 词典17
 山西翼城：屁股度蛋 p^hi³¹ ku⁰ tou⁰ tæ⁵¹ 小孩屁股 107
 山西长治：手咕嘟 səu⁵³⁵ kuə?⁵⁴ tuə?⁵⁴ 拳头 85
 山西万荣：手骨嘟 ɕəu⁵⁵ ku⁵¹⁻²⁴ tu²⁰ 拳头 志34
 山西和顺：拳圪掇 tç^hyæ²² kə?²¹ tuə?²¹ 拳头 65
 山西洪洞：拳圪斗 tçyan²⁴⁻²² ku⁰ tou⁰ 拳头 227

- 山西永济：捶骨嘟 pf^hei²⁴ ku²¹⁻²⁴ tu²¹ 拳头 40
 山西汾西：槌圪都 ts^hβ³⁵⁻²² kə³ tβ²¹ 拳头 34
 山西万荣：槌骨嘟 pf^hei²⁴ ku²⁴⁻⁰ tu³³ 拳头 (县西) 词典176-177
 山西阳高：皮锤圪督(kə[?]³¹ tu[?]³¹) 拳头 630
 山西左权：骨堵 kuə[?]²²⁻⁴⁴ tu⁵³ 拳头 598
 山西黎城：骨都 kuə[?]³⁻³¹ tu⁴⁴ 拳头 598

“孤拐”という語形が“踝骨”とは別個に独自に成立していたと仮定すると、それ自体は“踝骨”との間に類音牽引を生じるほどの音声的類似を示さない。更に既に指摘したように文字に即して「踝」という意味に理解することができないという点でも別個に成立していたとは考え難い。仮に“孤拐”が別個に成立していて、これと“踝骨”との間に類音牽引が生じたとしても、次に論ずる [kuai ku] は説明できても、[kuai xu] という形式を説明することができないという問題が残る。晋語には以下のような逆の語順の語が見られる：

- 山西原平：沫唾 mɔ[?]⁴ t^huɣ⁵³ 唾沫 79
 山西平定：沫唾儿 mə[?] t^hur³³ 唾沫 598
 山西忻州：沫唾 mə[?]² t^hue⁵³ 唾沫 315
 山西阳曲：沫唾 mə[?]² t^huo[?]² 唾沫 80
 山西定襄：泌唾 miə[?]² t^huo⁵³ 唾沫 43
 山西孟县：泌唾 miy[?]² t^huo⁴⁴ 唾沫 37
 山西寿阳：墨唾 miə[?]²² t^huəw⁴⁵ 唾沫 28
 山西武乡：弥唾 mɿ⁵⁵ t^huɣ⁰ 唾沫 30

また寧夏同心方言には以下のような語形がある：

- 宁夏同心：孤孤踝子 ku⁵⁵ ku⁰ xue⁵³ tsɿ⁰ 踝子骨 词典51

本章で扱う一連の語彙が“踝骨”ではなく、“骨踝”を起源としている可能性もなきにしもあらずである。しかしこのような構成要素の転置の類例は晋語圏以外では見られないのに反して⁴³，“孤拐”の分布は既に指摘したように

晋語地域に留まるものでなく、北方中国全域にわたって満遍なく分布している。如上の逆の語順の構成の語が見出せないような地域にも分布しているということであるから、“骨踝”という語形を起源とする想定は成り立たない。“骨踝 ku xuai”，“骨踝 ku xua”に該当する語形が、管見の及ぶ限りで上掲の寧夏同心方言を除けば1例も見当たらないということも否定の論拠の一つとすることができる。転置語形を元にしたとは考え難いということになると，“拐孤”から“孤拐”への変化もまた認められないということになりそうだが、この場合は連音変化によって語源があやふやになり、語構成について配慮されることもなくなってしまったと考えれば良いだろう。もし“古怪：風変わりである”という語が広く用いられているものならば、これとの間に類音牽引が生じた可能性もある。結局のところ“孤拐”は“踝骨”が変化して出来た語形に当て字がなされたものである可能性が高い。“孤拐”は上に指摘したように「頬骨」などを言う場合にも用いられる。所与のデータからは「頬骨」から“孤拐”が生じたとは考えられないので、「踝」を基に生じたものであると見なし、同じ形状である「頬骨」に転用されたものと考えておく。

注

(8) 「股」の方は「カラス貝」, 「よだれ」を表す語形との間に類音牽引を生じたと思われる語彙がある。当面のテーマとは離れるので、以下にその一端を記すに留めたい：

河北高邑：海拉八儿 蚌 655 =元氏 469, 新乐 686

河北灵寿：海拉巴 河蚌 志705

和拉子 $xə^{22}la^{22}tsə^0$ 涎水 志700

河北张家口：腿哈拉 $t^huei^{55}xʁ^{?}la^{42}$ 胯下 志1909

颌拉水 $xʁ^{?}la^{42}suei^{55}$ 口水 志1908

河北巨鹿：腿閔兒儿 $t^hei^{33}xə^{31}lar^{21}$ 两腿之间 703

喝拉拉 $xə^{33}la^{33}lar^{33}$ 口水, 唾涎 701

資料上の制約で、一方言で問題とする語彙が揃う場合が稀なのでこれらの例だけからでは分かり難いかもしれないが、先に挙げた「股」の例と比べるとその類似をより強く見てとることができるであろう。

(9) 方言調査報告の兒化韻の音声表記は不完全な形態音韻論的表記であることが多い。この場合も [meir] の実際の音価は [mɤ] である可能性が高い。山東方言の「蚕」にはこの他以下のような例がある。

山東寿光：蚕们儿	ts ^h ã ⁵³⁻³⁵ mǎr ⁰	蚕	130；“儿li ⁵³ ”
山東臨淄：蚕们儿	ts ^h ã ⁴²⁻²¹³ mǎr ⁰	蚕	564；“儿lǎ ⁴² ”
山東臨朐：蚕们儿	tθ ^h ã ⁴²⁻⁵⁵ mǎr ⁰	蚕	564；“儿lǎ ⁴² ”
山東利津：蚕妹儿	ts ^h ã ⁵³⁻⁵⁵ meir ⁰	蚕	107；“儿lǎ ⁵³ ”
山東博興：蚕妹儿	ts ^h ã ⁵³⁻⁴⁴ meir ⁰	蚕	594；“儿lǎ ⁵³ ”
山東博山：蚕妹	ts ^h ã ⁵⁵⁻²⁴ mei ⁰	蚕	研究 124；“儿lǎ ⁵⁵ ”
山東淄川：蚕妹	ts ^h ã ⁵⁵⁻²⁴ mei ⁰	蚕	130；“儿lǎ ⁵⁵ ”

形態音韻論的表記の中途半端な例としては -n 韻尾韻の兒化韻をあたかも鼻母音であるかのよう表記する例が少なくないが、仔細に例を検討すると -i 韻尾韻の兒化表記と混乱しているところが見られ、実際には鼻母音でないことが分かる。上掲例の二音節目の実際の音声は最後の二例以外はいずれも [mɤ] であろうと思われる。聊城方言と異なり、これらの方言では“儿”の字音と兒化韻との間にズレが見られるが、これは兒化韻を形声するのに関わった“儿”が単字音形式では現れなくなってしまったと解される。つまり単字音形式は恐らくより新しい層の字音に取り替えられてしまったのである。

(10) また別に以下のような例もある：

“壁虎”

河北秦皇島：蝎拉虎子 ciē³⁵ ly⁰ xu²¹⁴ tsɿ⁰ 壁虎 117(=河北山海关 606)

河北固安：蝎了虎子 ciē⁵⁵ lǎ⁰ xu²¹⁴⁻²¹ tsə⁰ 壁虎 834

河北定興：蝎里虎子/xie³³ li⁰ hu²¹³⁻²¹ zi⁰/ 126

蝎里虎儿/xie³³ li⁰ hu²¹³⁻²¹ [uər]/ 126

北京平谷：蝎拉虎子 ciē³⁵⁻⁵⁵ lǎ⁰ xu²¹⁴⁻²¹ tsə⁰ 壁虎 180

北京密云：蝎拉虎子 ciē⁵⁵ lǎ⁰ xu²¹⁴ tsə⁰ 壁虎 636

河北青县：蝎拉虎子 ciē⁴² lǎ⁰ xu²¹³ tsɿ⁰ 壁虎 756

河北平乡：吸溜虎儿 ci²¹ liou⁵³ xur⁵⁵ 壁虎 866

天津东丽：蝎列虎子 壁虎(么六桥村话) 908

これらの方言形式に見られる“蝎”に後続する[1]で始まる第二音節もまた概略、

*hiɿt ho→ɕiɿt tɿ ho→ciə? lǎ xu→ciə lǎ xu

というような変化を経て、“蝎”がかつて持っていた入声韻尾 -t を二音節化して声母の形で残した結果かも知れない。但し、そうであれば“壁虎”という語形がかなり古くに成立していたことになる。他に“蝎虎留子”“蝎虎鲁子”というような、[1]で始まる音節が“虎”の後に来る語形も存在しており(今具体的な地名、音声表記は省略)、これらとの関係についても検討を加える必要がある。如上の変化を推定するに当ってはなお慎重であらねばなるまい。

(11) この論法で行くと“核儿”はあるから、“核儿骨”は存在の余地があるが、この語形も今のところ報告例はない。類似の形式としては陝西綏徳方言の“踝二骨”，子長方言の“滑二骨”が

あるが、この語形の成立については § 2.2 で論じた。

- (12) 『老朴集覽』 朴上2-1に見える (李丙疇『老朴集覽考』 進修堂1966.3)。『朴通事諺解』 上4表に見える割注はこれに基づく。現存の『老朴集覽』が原本と異同のないものであるならば、同書の成立は1517年以前らしいから、この記述もまた1517年以前のものということになるが、何に基づいているのか不明。田村祐之「『朴通事諺解』 翻訳の試み」『饗養』4 1996.9 pp.57-91 の pp.84-85 及び山川英彦「『老朴集覽』 覚え書」『名古屋大学文学部研究論文集』 LXX 文学24 1977.3. pp.61-72 参照。
- (13) 動物のオスメスを表す要素が後置される例は他の北方方言地区でも見られるが、例えば“鸡母”などは「メンドリ」ではなく「ニワトリのメス」というような語構成ととるべきやも知れず、それを除けば該当例は見当たらない。

河南信阳地区：鸡公 公鸡。(新县，光山，信阳市，信阳县) 940

(= 陝西南郑 644, 石泉 686, 镇巴 649; 甘肃陇西 707, 舟曲 676)

陝西凤县：鸡公 tci²¹⁴ kuŋ⁰² 公鸡 593 (= 甘肃张家川 1413, 通渭 664, 成县 821)

河南信阳地区：鸡婆 母鸡。(新县，光山，信阳市，信阳县) 940

陝西凤县：鸡母 tci²¹⁴ mu⁰² 母鸡 593

陝西吴旗：鸡婆儿 tci³ p^{buor}⁴¹ 母鸡 908 (= 延安 715)

山东平邑：山羊母 ʂan²¹³⁻²¹ iaŋ⁰ mu³⁴ 母山羊 78

山东郯城：山羊母儿 ʂæ²¹³⁻²² iaŋ⁵⁵ mur²⁴ 母山羊 85

山东微山：山羊母子 sā²¹³⁻²¹ iaŋ⁰ mu³⁵ tsŋ⁰ 母山羊 1125

山东枣庄：绵羊母 miæ⁵⁵ iaŋ⁵⁵ mu²⁴ 母绵羊 83 (= 山东滕县 563)

山东郯城：绵羊母儿 miæ⁵⁵ iaŋ⁵⁵ mur²⁴ 母绵羊 85

(待続)

* 本論文は平成15年度文部科学省科学研究費 基盤研究 (B) (課題番号 13410130) 「歴史文献データと野外データの総合を目指した漢語方言志研究」の研究成果の一部である。